

小学生新聞の投書における結束性

設 楽 馨

一・小学生新聞と投書

新聞には、読者が書いた文章が掲載されることがある。それらは一般に投書と呼ばれる。投書は、大人向けの一般紙では、決まった曜日、決まったページに掲載されることが多い。しかし、小学生向けの新聞では、少し事情が異なる。例えば、読者のイラストやおたよりのページがあったり、あるいは、読者リポーターやインタビューとして小学生が紙面に登場したりすることがある。しかし、読者が定期的に意見を述べる紙幅が準備されている、とは言い難い。

ところが、ⁱ「毎日小学生新聞」では投書を集めた「ゆうだい君の手紙」を掲載した。この特集は、二〇一一年五月、東日本大震災後に批判が高まっていた東京電力に勤務する父を持つ小学生の意見文に対し、読者計三十九人が原発の要不要や節電、エネルギー問題へ意見したものである。五月末から七月末まで、計六回に分けて掲載された。しかも、都度一面と二面に渡って大々的に取り上げられ、読者の関心の高さがうかがえた。特集後、掲載されなかった投書を含め、ⁱⁱ書籍化されたことから、相当な数の投書があったのだろうと推測できる。特集初日の編集部の言葉は左に引用したとおりで、読者の関心の高さや、投書の集中度合いをうかがい知ることができる（なお、「毎日小学生新聞」の引用においては振り仮名を削除する）。

全国の読者から、さまざまな意見が編集部に届きました。その一部を紹介します。（第26088号）

このように、複数の投書者による文章が日をまたいで継続して一つのまとまりを成す、つまり、結束性を有していることは、テキスト研究の観点から見て大変に興味深い。結束性とは、次章で詳述するとおり、通常は語句のレベルであれば、文と文と

の結束性として指摘される。あるいは、節のレベルでテキストとして構成されることに及ぶ。長さは問わないのだが、しかし、日を置けば、また、テキストの書き手が異なれば、結束性が弱まることが予想できる。

そこで本稿では、小学生新聞というジャンルにおいて、複数の投書者による特集記事が一つのテキストであると仮定し、その結束性を論じる。

二．テキストのまとまりを定義する結束性

本稿における「結束性」とは、ⁱⁱⁱハリデイ・ハサン（一九九七年）が提唱した概念で、“cohesion”である。引用によって定義を確認する。

結束性の概念は、意味的なものである。それは、テキスト内に存在し、テキストをテキストとして定義する意味の諸関係のことである。(p.5)

その性質が認められる、具体的な結束的要素として、指示、代用、省略、接続、一般名詞などに分類して論じ、「テキスト (TEXT) とはどういう意味であるか」、「テキスト性を形成する言語的手段を指すのに結束性という概念を導入した。」(p.385)とし、典型的には、どのようなテキストにあっても、最初の文を除くあらゆる文は、先行文（普通は直前に先行する文）と何らかの形の結束性を示す。言い換えれば、あらゆる文は、その文を先行文と関連づける、逆行照応なつながりを少なくとも一つ含んでいる。(p.385)

と説明する。

この説明にある「テキスト」の定義もハリデイ・ハサン（一九九七年）を参照する。すると、「単に文の連続ではな」(p.385)く、「統一された全体を構成している一節を指す」(p.1)のであり、「母語で書かれた文章ならどんなものを見せられても、そ

れがテキストを構成しているか否かは、たいていわかる」(p.1) というものを指す、とある。「テキストに特徴的で、テキスト以外には見いだされない若干の特徴がある」(p.1) ことを出発点とし、「これらの要因が」結束性である、と示す。「意味的な」概念として導入されるテキストは、話しことばか書きことばかといった限定がない。「散文の場合も韻文の場合も、対話の場合も独りごとの場合もある。長さは、一つのことわざから一つの劇全体の場合もあるし、とっさに助けを求める叫び声から、委員会での終日にわたる議論の場合もある。」(p.1) とする。

つまり、ハリデイ・ハサン(一九九七年)における「結束性」とは、文章や談話に観察しうる、テキストを意味的に成立させる逆行照応なつながりがあるもので、単語や節といった項目が担う意味的なものである。

これに近似する概念として、「伝達・発話行為上の結束性」‘coherence’を指摘するスタップズ(一九八九年)は、「我々の談話能力の一部には、表層の語彙上、あるいは命題上の結束性においては明らかでないところでも談話上の結束性を見出す能力が含まれている」(p.215)として、「談話の結束性を説明するためには、表層上の語彙的、統語的結束性や論理的な命題の発展を説明する必要があるばかりでな」いことを強調した(p.178)。その前提には、スタップズが著した当時(原著は一九八三年)の「談話」分析における「談話」への批判が込められており、「理想化されたデータ」(p.214)あるいは、「つくられた資料」(p.214)を「談話」とすることを直接的に非難して、用語を定義する著書冒頭で、次のように述べている。

驚くべきことには、(a)孤立した(b)人為的に造られた(c)文脈から捨象された文の研究でさえも、そのうちのあるものは談話研究に割り込んでくるのである。例えば、発話行為理論に関する重要な文献の大部分がそれである。(p.13)

ここで、(a)は「研究すべき単位の大きさ…基本的に文より大きい小さいか」、(b)は「これらの連続体が言語学者によって作られたものか自然に発生したものか」、(c)は「文脈の非言語的要素も研究対象にすべきかどうか」という問題であり、言語研究の際、どの程度正当化できるかを決定しなければならない三項目と位置づける(三項目いずれもp.13より引用)。

スタップズ(一九八九年)が採用した「談話」は、Halliday and Hasan(一九七六年)の「テキスト」や、ファン・ダイ

クに代表される特定のヨーロッパのグループの研究を含意する「テキスト分析」における「テキスト」、^{vi} サックスに代表される「会話分析」における「会話」を対照した結果、「改まった話し言葉と書き言葉の研究を除外」しない、「文（もつと正確には節）より上位の言語ばかりでなく、自然に生じた言語」（p.10）を扱う立場に立つ。そうした談話の「伝達・発話行為上の結束性」“coherence”について、「発話行為、間接発話行為（ここでは、発話の力が緩和表現あるいは丁寧表現のマーカーに包みこまれている）、発話の力の文脈依存、それに、ある発話行為の連鎖上の帰結（予測力）も説明しなければならぬ。言葉を換えれば、談話の結束性についていくつもの理論を持つていなければならぬのである。」（p.178）と述べる。

なお、結束性“cohesion”と、伝達・発話行為上の結束性“coherence”を区別するため、以下では二つ目に挙げた“coherence”の訳語は「首尾一貫性」（龍城（二〇〇六年））とする。

三．理論と資料について

本論では、小学生新聞に掲載された投書をテキストとし、結束性 cohesion、つまり、先行文と逆行照応なつながりを有する句や節の諸関係を論じる。ただし、新聞というジャンルでは、架空のテキスト性（ハリデイ・ハサン（一九九七年） pp.390-391）が指摘されている。しかも、架空のテキスト性は新聞で最初に読むリード文や見出しに認められるため、結束性の前に整理しておく。次に、投書の結束性の具体例として、指示、省略、接続を取り上げる。一人の投書者による投書に結束性があり、一つのテキストと認められることを確認した後、特集全体の首尾一貫性 coherence の具体例として、別人の投書者による投書群を取り上げる。

投書において結束性だけでなく首尾一貫性を論じることは、スタップズ（一九八九年）が問題視する「(a)孤立した(b)人為的に造られた(c)文脈から捨象された文」において、(a)に関わる「研究すべき単位の大ささ」の違いから、より広い範囲の問題と

して、特集全体をテキストとして扱ったためだ。首尾一貫性に関連して、テキスト形成的意味“textual meaning”や主題“Theme”の定義は、首尾一貫性を論じる六章で詳述する。

改めて整理すると、本稿では小学生新聞の投書をテキストとして、架空のテキスト性、結束性、首尾一貫性の順に論じる。いずれも現代英語のテキスト論の概念であるため、日本語に援用できる理論であることを検証し、テキストの記述を進める。

小学生新聞の投書とは、本稿では「毎日小学生新聞」に特集された投書「ゆうだい君の手紙」を取り上げる。一連の投書の掲載日と号数（創刊からその日の新聞までの通し番号）、本稿で引用した投書の見出し、投書者の情報【出身地・年齢または学年・性別】は次のとおり。（投書者の情報は、新聞記載から判明する範囲で転記する。）

- 二〇一一年五月三十日（第26088号）大変なのは東電だけじゃない【北海道稚内市：小六・男】、東電だけが悪いんじゃない【女】、まずは、謝るべきだ【大阪府堺市：小五・男】、電気にたよらない生活を【奈良県奈良市：中二・女】
- 同年 三十一日（第26089号）福島にあることが、おかしい【岐阜県岐阜市：中一・女】、原子力にたよりすぎ【神奈川県相模原市：小五・男】
- 同年 六月一日（第26090号）東電はもうけを重視した【東京都小平市：三児の母・女】
- 同年 六月二日（第26109号）電気は必要だけど…【東京都：小六・女】
- 同年 七月二七日（第26115号）まずは自分たちができることを【福島県郡山市：小四・女】

四．リード文や見出しにみる架空のテキスト性

本テキスト（特集）の第一の文を、新聞のリード文とする。また、投書の第一の文を「見出し」とする。この前提に関わり、ハリデイ・ハサン（一九九七年）が言及する「架空のテキスト性」を整理しておく。架空のテキスト性が、リード文や見出しに認められるからだ。

読み手や聞き手に予想を設定することによって、架空のテキスト性を押しつけるタイプの結束性に言及する。しかし、その予想は、過去にかかわるものなので、どうしても満たされることはない。(p.390)

新聞に関わる特徴として、次のように指摘する。

多くのニュース報道では、それを理解するには、前日の新聞は同じテキストの一部であるという想定が必要である。(p.391)

リード文から見ていく。リード文には、特集するに至った経緯が述べられた。冒頭の一文を示す。

5月18日の毎小で、東京電力につとめる父親を持つゆうだい君(東京都・小6)の手紙を紹介しました。(第26088号)

掲載日は「五月三十日」なので、リード文に明記された日付「5月18日」は読み手にとって過去である。三十日の読み手が、十八日の記事もテキストの一部であるという想定をすることが必要であり、架空のテキスト性を押し付ける。

次に見出しを挙げる。ただ、一口に見出しと言っても、見出しは大小、複数のタイプが存在する。その中で最も先行する第一の文を特定するに当たり、最も大きな文字で、通常と異なるデザインを持つ文(あるいは句)、つまり、最も目立つレイアウトが施された見出しを第一の文と位置付けた。二〇一一年五月三十日一面(特集の第一ページ目)の第一の見出しは、次のとおり。

批判されてもプロとして力発揮を(第26088号)

ここで「批判」は、五月十八日の「ゆうだい君の手紙」に書いてあった東電への批判である。そのため、リード文同様、過去を設定した架空のテキスト性が認められる。

最後に、投書の小見出しを検討する。

大変なのは東電だけじゃない(第26088号)

「大変な(状況)」や「東電」は、五月十八日の「ゆうだい君の手紙」に述べられたことを指す。リード文や第一の見出しと同様、過去を設定した架空のテキスト性が認められる。小見出しの直後の一文は次のとおりである。

ゆうだい君の「みんなで考える」という意見には大賛成です。(第26088号)

ここでも、「ゆうだい君」「みんなで考える」は、五月十八日の「ゆうだい君の手紙」を指す。リード文や第一の見出し、小見出しと同様に、読み手に過去の記事を含めてテキストの一部となる想定を設定させ、架空のテキスト性を生じさせる。

つまり、リード文及び見出しは、架空のテキスト性を押し付けることで結実性が認められる。こうした結実性をハリデイ・ハサン(一九九七年)では、「偽りの(または未決定の)結実性」(p.391)としている。

五. 投書にみる結実性

一人の投書者による投書における結実性は、ハリデイ・ハサン(一九九七年)の結実要素のうち、指示、省略、接続が認められた。それぞれ、例を挙げて確認する(傍線は筆者による)。

(一) 指示・代用

東京の人たちが使う電気を福島でつくっている。そのせいで、福島の人たちは、被害を受けている。(第26089号)

電気がたりなくなってきたとき、東京電力には二つの手段がありました。一つ目は節電のお願いをする。二つ目はもっと電力をつくる。東京電力はこちらを選びました。(第26090号)

東電は、わざわざきけんな原子力発電所をつくり、がんがんだかし、きけんを背負いながら動かしています。なので、つ波がくるとこわれて、今のようにな、人に害をあたえます。それにくらべて、火力発電、水力発電、風力発電などは原子力発電にくらべ、事故はありません。(第26089号)

傍線を引いた「その」と「こちら」と「それ」は、指示詞として逆行照応的な指示を見出すことができる。「その」は、先行文の「東京で使う電気を福島で作る」ことを指示する。「こちら」は、先行文の中でも直前に(近いほうに)置かれた「二

つ目」であり、「もつと電力を作ること」を指示する。「それ」は、「原子力発電（所）」を指示する。「それにくらべて」という一文には、文中にもう一度「原子力発電にくらべて」があり、文の成分が重複している。ただし、成分の重複は、結束性に関わるものではなく、あえて非文のまま掲載することで投書者の^{viii}子どもらしさを生成する文体の特徴だと考えられる。また、代用による結束性は、今回、見当たらなかつた。本稿では、指示に近い位置にあるものとして、「指示・代用」とするにとどめる。

(二) 省略

東京電力は、その「安全」について全力で配慮していたか？ 答えは「NO」といえるでしょう。(第26090号)

傍線を引いた「NO」は、逆行照応的に「東京電力が安全を全力で配慮していない」という否定の極性「いない」を明示し、そのほかを省略する。

(三) 接続

もし、何か事故が起きたら、お金で払えばいいんだからなどと簡単に考えていたから、おせん水を海に流すというわけのわからないことをしてしまったのです。だから、東電は人々のことを考えているのかなどと言われるのです。(第26109号)

私たちに今何ができるのか。その一つ目は、マスクとぼう子を着用することです。放射線をあまり浴びなくてもよくあります。二つ目は、勉強をすることです。えらい人が「窓をあけても大丈夫ですよ」と言っても、本当はダメだったりすることがあるので、勉強をしたほうがよいと思いました。

東電も悪いし、正しい情報を送らない政府も悪いと思います。けれど、自分たちでできることは、実行した方がいいと思います。(第26144号)

接続は、ハリデイ・ハサン(一九九七年)において「ほかの結束関係とはかなり性質が異なっている。すなわち、一方では指示とも、他方では代用や省略とも異なっている。接続は、単に逆行照応関係にとどまらない」(p.293)と説明されるように、

「それ自体結束的なのではなく、間接的に、その要素が特定の意味をもっているために結束的」だとする、異質な結束関係である。特定の意味として、傍線を引いた「だから」は付加的、「けれど」は反意的である。「だから」は、前文で「汚染水を海に流すという行為」に連続して次に発生する「東電批判」に付加的に接続し、結束的な「だから」だと考えられる。「けれど」は、前文「東電や正しい情報を発信しない政府が悪い」とすることに對して、東電や政府へ要求するなどの予想に反している。ここでは、冒頭「私たちに今何ができるのか」の解となる「自分たちが出来ることを実行に移す」という意見を述べる。

以上、指示・代用、省略、接続、おおまかに三種の結束的要素を挙げ、投書の結束性を確認した。一人の投書者による一本の投書は、文と文、文章のまとまりにおいて結束性が認められ、一つのテキストである。

六. 特集にみる首尾一貫性

(一) 主題とテキスト形成的意味

首尾一貫性を検討する概念として、ここでは主題 Theme の定義を整理する。主題とは、龍城(二〇〇六)によれば、「何について話しているか」あるいは「現在伝えたいのはこれである」という要素で、「常に節頭に具現すると言われ」、^{ix} Halliday(一九九四年)を引いて「メッセージの起点としての役割を果たす要素であり、話し手が語ろうとするもの」と定義した(p. 87)。主題は次の三つの分類がなされている。「この部分が節の経験(意味・内容)を表す(すなわち過程構成の要素) 出発点である『位置』を表して」いることから「話題的主题」、英語は疑問節において節頭に Did, Could, Is を伴う場合は経験的機能がないことから「対人的主题」、先行テキストとの関係を表すため節頭に接続詞を必要とする場合は経験的機能も対人的機能も含まれないことから「テキスト形成的主题」である (pp. 88-90)。このうち、日本語では疑問節の文法構造が異なり、節頭に対人的機能を含む「対人的主题」は用いられない。

そして、節頭に置く主題ほか、「単語間の配列の交替によって意味変化が生じ」、「話し手の意図する意味の変化が生じる」とき、「具現された意味」を「テキスト形成的意味」と呼ぶ (p86)。

主題のうち、投書に認められた話題的主题を挙げ、投書におけるテキスト形成的意味を確認する。

大変なのは東電だけじゃない (第26088号)

特集最初の投書に付いた見出しが右のものだ。このうち、傍線を引いた「大変なの」が接頭であり、主題である。ここで「大変なの」が「東電」だけを意味しているのならば、ゆうだい君の手紙、つまり過去の新聞は同じテキストの一部であるという想定が必要で、四章に述べた「偽りの結束性」に関わる。けれども、当該の投書では、投書者である北海道稚内市・小六・男子の父も(東電で働くゆうだい君の父と同様)「大変なの(状況)」だと主張するものであり、主題に続く部分、題述 Rheme は「東電だけじゃない」と否定している。そのため、「大変なの」は、ゆうだい君と投書者と、両方の父の経験(内容)を表す出発点である「位置」を示すことになる。話題的主题が、一本の投書としてのテキスト形成的意味(書き手の意図する、具現された意味)を支えている。

(二) 特集における話題的主题

投書の接頭は、話題的主题であった。話題的主题は一本の投書としてのテキスト形成的意味を支えていることも確認した。ほかの投書の接頭は、どのような主題を選択するのか。同日の投書の見出し(ゴシック体)と、一文目(明朝体)を例に、主題を確かめる。接頭主题に傍線を引き、投書の順を漢数字一から四で明示する。投書者の情報も再掲する。(次の例示より見出しはゴシック体である。)

- 一 大変なのは東電だけじゃない ゆうだい君の「みんなで考える」という意見には大賛成です。【北海道稚内市・小六・男】
- 二 東電だけが悪いんじゃない 私はゆうだい君の手紙をよんで、涙がぼろぼろでてきました。【女】
- 三 まずは、謝るべきだ 今、原発の事でいろいろなことがおこっている。【大阪府堺市・小五・男】

四 電気[たよらない生活を 私も電気はとても便利だと思し、電気があるから安心して生活できると思っています。】奈

良 泉奈良市・中二・女

(以上、第26088号)

二以降を見ると、いずれの接頭も接続詞でない。つまり、ほかの投書者の投書と一緒に、いくつかの投書を配置するとき、「テキスト形成的主题」は選択されない。話題的主题のみで、投書者各々にとって最も大切な内容が展開されていくのである。

(三) 語彙的結束性の意味としての、首尾一貫性

投書者各々の話題的主题がどのように結束性を備えるのか。ハリデイ・ハサン(一九九七年)「第7章 結束性の意味」では、語彙的結束性において、「語彙的意味の連続性によって結束的效果が達成される」という原理を述べる(p.418)。その語彙的結束性の一つ、再叙 REITERATIONは「指示の脈絡での語彙項目の繰り返し」である(p.416)。新聞の特集では、二の主題「東電」は一の題述「東電」を繰り返す、同一語の繰り返しにより語彙的結束性を有し、一と二の投書の結束性を生じさせる。三の主題「まず」は、ゆうだい君の意見「みんなで考える」ことをしている時間を起点に、対照的に派生する時間(あるいは順序)であり、同位語として、対照的な指示関係による語彙的結束性を生じさせる。四の主題「電気」は、一や二に含まれる「東電」がつくるエネルギーであり、「東電」の上位語として、排除的な指示関係による語彙的結束性を生じさせる。

ハリデイ・ハサン(一九九七年)によれば、こうした「語彙的パターン化が本質的に蓋然的な性質を備えているため」、また「語彙的パターン化は、構造の範囲外にあり、構造的関係に制約されることはないので、一連の互いに関係のない構造を、統合された、首尾一貫性のある統一体に変換するのに寄与する」(p.418)という。語彙的結束性を有する、投書者の異なる投書が、首尾一貫性のある統一体の「特集」というテキストを構成している。

(四) 今後の課題

そのほか、結束性及び首尾一貫性について、巨視的な視点を持つと、他日に及ぶ投書に共通する語彙や句が認められそうだ。それらを検討することで、本テキストの編集部(文章改変や紙面構成をする書き手)が読者(次世代の小学生を主とした読み

手)に、原発事故責任、原子力発電の是非、放射能汚染など、当時の課題の解をどのように示したかったのか、批判的談話分析ができるのかもしれない。今後の課題としたい。

七. まとめ

以上、複数の投書者による投書の特集において、それらを一貫したテキストと認める場合、どのような結束性や首尾一貫性が認められるのか、考察した。新聞ならではの見出しやリード文では「架空のテキスト性」を、文と文の間には指示・代用、省略、接続といった結束的要素を、投書と投書の間には話題的主題によるテキスト形成的意味と語彙的結束性による首尾一貫性を検討した。ハリデイ・ハサン(一九九七年)ほか、前提となる議論は英語で進められる。今回は、新聞というジャンルで、かつ、日本語のテキストにおいて検討した。そのため、主要な日本語訳に基づき、定義の再確認も慎重に取り組んだ。今後の課題についてはいずれ稿を改めて取り組みたい。

謝辞 結束性や首尾一貫性などハリデイ・ハサン(一九九七年)他の理論について、また日本語への応用を検討する諸研究について、本学教授 佐藤勝之先生に丁寧な指導を賜りました。記して感謝いたします。

注

- i 昭和十一年創刊の日刊紙で、二〇一九年現在、紙媒体ではタブロイド判の八ページ(平日と日曜日)あるいは十二ページ(金曜日と土曜日)、また、デジタル版もあり、どちらも一か月税込み一、五八〇円。
- ii 『僕のお父さんは東電の社員です』森達也(二〇一一年)現代書館

- iii 『テキストはどのように構成されるか―言語の結末生―』 M. A. K. ハリデイ・ルカイヤ ハサン、安藤貞雄ほか訳（一九九七年）
ひこじ書房、（原著は Halliday, M. A. K. and Hasan, Rukaiya. *Cohesion in English*. London: Longman. 一九七六年）
- iv 『談話分析』 マイケル・スタップズ、南出康世・内田聖二訳（一九八九年） 研究社出版（原著は Stubbs, Michael. *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Chicago: University of Chicago Press. 一九八三年）
- v Van Dijk, T. A. *Text and Context*. London: Longman. 一九七七年
- vi Sacks, H. *Unpublished Lecture Notes*. University of California. 一九六七―一九七二年
- vii 『ことばは生きてゐる 選択体系機能言語学序説』 龍城正明（二〇〇六年） くるしお出版
- viii 小学生新聞における子どもらしさの生成については、近刊『武庫川女子大学研究紀要（人文社会科学編）第六七号』に掲載予定の筆者による「3.11 原発事故をめぐる小学生新聞の投書」にて詳述した。
- ix Halliday, M. A. K. *An Introduction to Function Grammar 2nd ed.* London: Arnold. 一九九四年

（したら・かおる 本学専任講師）